

山口県埋蔵文化財調査報告第141集

だいもん 遺跡

平成2年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告



1991

財団法人山口県教育財団
山口県教育委員会

表紙写真
鬼ヶ城から豊浦平野を望む

例 言

1. 本書は、県営園場整備事業に先立ち、山口県農林部の委託を受けて財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が平成2年度に実施した豊浦郡豊浦町大字黒井字上大門に所在する大門遺跡の発掘調査の概要報告である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団 (理事長 高山 治)

山口県教育委員会 (理事長 高山 治)

事務局 財団法人山口県教育財団 (事務局長 田中義人)

山口県教育委員会文化課 (課 長 山田泰久)

調査担当 【総 括】 山口県埋蔵文化財センター (所長 山田泰久)

(次長 中村徹也)

【調査員】 財団法人山口県教育財団事務局 指導主事 鈴木 卓

同 同 和田嘉之

同 同 河名達雄

同 同 三好祐司

山口県埋蔵文化財センター 指導主事 岩崎仁志

【援 助】 山口県埋蔵文化財センター職員

3. 発掘調査の実施にあたっては、山口県農林部耕地課・山口県下関土地改良事務所・豊浦町役場・豊浦町教育委員会および地元の関係各位から多大な援助協力をいただいた。また、石材鑑定は山口県立博物館の橋本基一氏の御教示を得た。記して謝意をする次第である。
4. 本書に掲載した地図(図1)は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「川棚温泉」を複製使用したものである。
5. 本書に使用した方位は国土座標の北で示し、標高は海拔で表示した。
6. 本書は、中村の指導・助言を得て、鈴木が編集した。

目 次

大門遺跡の位置と周辺の環境	1
発掘調査のあらまし	2
姿を現わした遺構と遺物	5
まとめ	20

序

本県では、恵まれた自然環境の中、豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策を推進しておりますが、これらの事業に伴う開発工事からかけがえのない埋蔵文化財を保護するとともに、開発と文化財保護との調和のとれた県土づくりを行うため、財団法人山口県教育財団並びに山口県教育委員会は、圃場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。平成2年度に実施いたしました豊浦郡豊浦町大字黒井字上大門所在の大門遺跡の調査では、弥生時代の集落跡の一部等が発見され、当時の人々の生活や文化を知るうえで貴重な史料を数多く得ることができました。発掘調査の成果をまとめた本書が、学術・教育の資料として利用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを願うものであります。

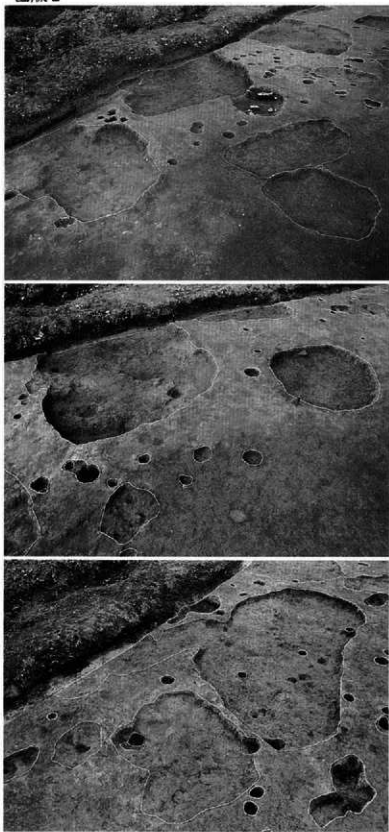
おわりに、調査にあたりまして御指導・御協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

平成3年3月

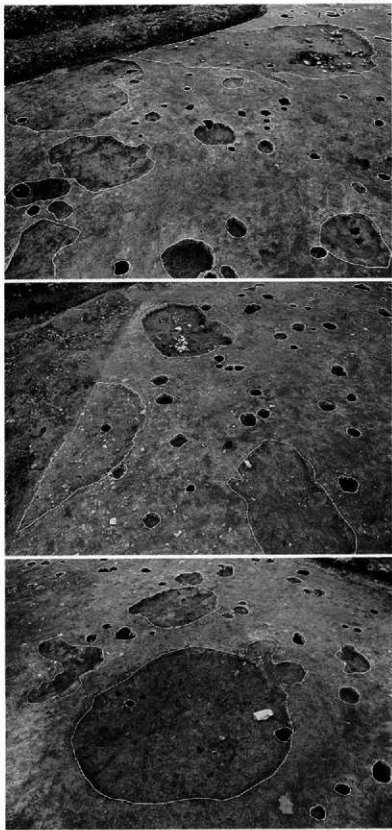
山口県教育財団 理事長 高山 治
山口県教育委員会 教育長 高山 治

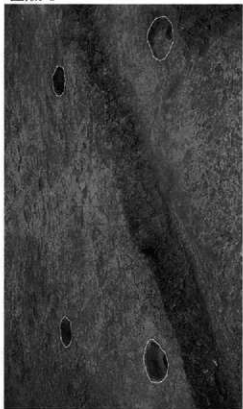
第 1 地区完掘



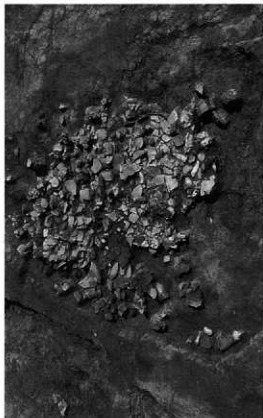


第 2 地区完棚





▲11号罐物跡完備



▲土罐土器出土状況 (左上1号、左下2号、右下46号)



▲柱穴 (图 3 矢印) 土器出土状况▲



▲土器出土状况 (左上41号、右上2号、左下41号)

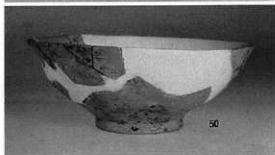
図版 6



▲20号土壌陶埴出土状況



49



50

▲柱穴から出土した土器 (図3 矢印)



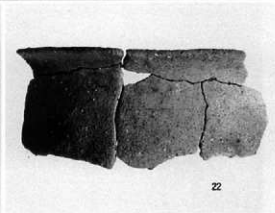
3



51



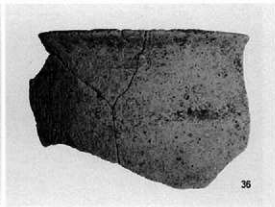
17



22

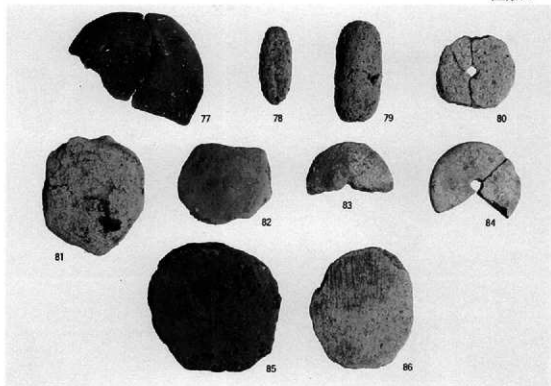


33

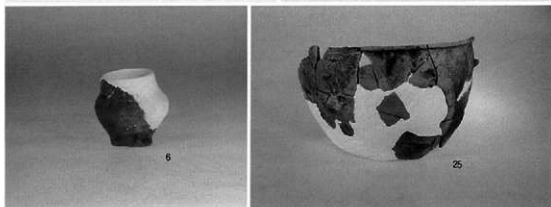
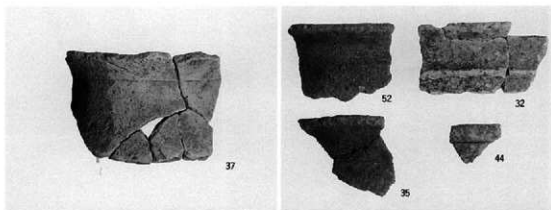


36

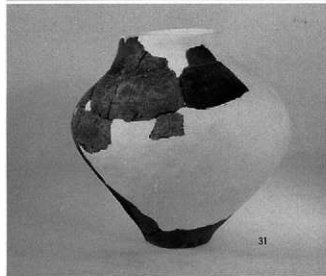
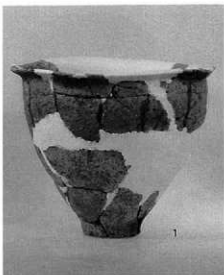
▲土壌から出土した土器

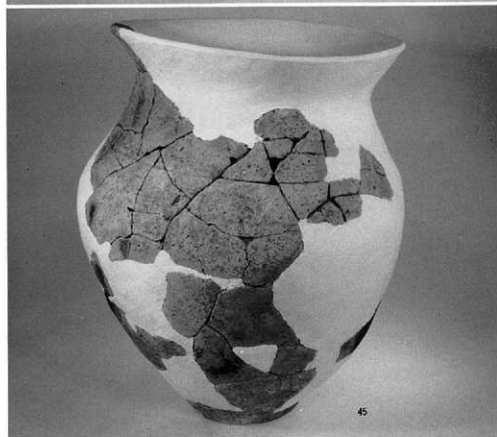


▲出土した土製品



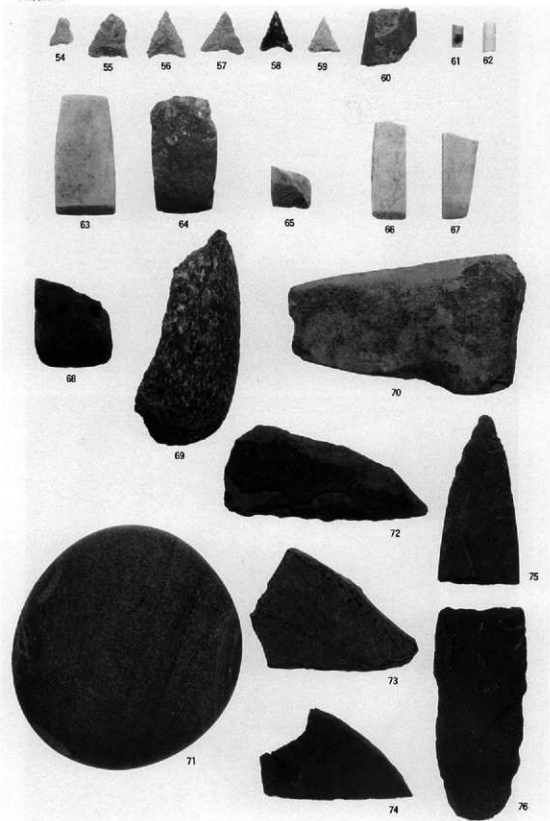
▲土壙から出土した土器





▲土壙から出土した土器

図版10



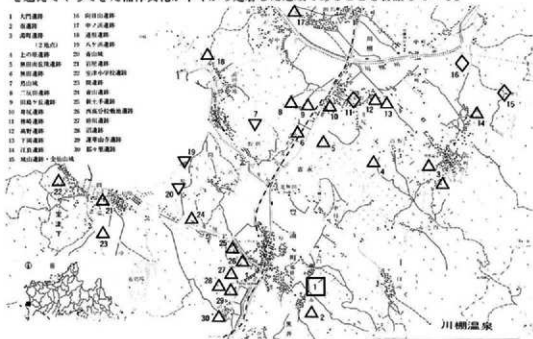
▲出土した石器

位置と環境

遠く異国の大地へとつながる響灘、その水平線に沈む夕日に赤く照らされる低い丘陵の上に大門遺跡は眠っていた。

今回の調査地区は、豊浦郡豊浦町大字黒井字上大門に位置する。調査地区のすぐ西の道は旧北浦道筋で、付近に「市」などの地名が残っている。眼下に望む海岸には、文永12年、元の日本宣撫使の一行が上陸した室津があり、古くから大陸との交流があったことをうかがわせる。調査地区の遙か北には狗留孫山を主峰とする急峻な山地が東西に連なって海にまで達し、南には断層線によって分かれた300m前後の山が並ぶ。東には鬼ヶ城を主峰とする山々が聳え、ここを源流とする小河川が、山麓の丘陵を浸食しながら西へと流れて響灘に注ぐ。河口付近には砂丘が形成され、その背後には小規模な沖積平野が発達している。川棚川下流と吉永川・黒井川・沖田川下流の沖積平野は比較的広く、各時代の遺跡もここに集中している。

大門遺跡に集落が営まれていた弥生時代前期の遺跡も数多く確認されている。川棚温泉駅の南に広がる低地帯には無田遺跡がある。前期末から後期の土器片や木製農具などが発見されている。この北に隣接する低い台地に前期末の土器の詰まった溝と土壌群が見つかった田島ヶ丘遺跡がある。住居跡は未発見だが、この一帯に水田を伴う集落跡が眠っている可能性は大きい。また川棚川河口の砂丘上には、前期から中期初頭の大きな埋葬遺跡の中ノ浜遺跡がある。箱式石棺など様々な形式の墓、細形銅剣などの多彩な副葬品は当時の繁栄を偲ばせてくれる。このほかにも、この地域には下関遺跡など弥生時代の早い時期からの遺跡が密集している。海を越えてやってきた稲作文化が早くから定着した地域であることを物語っている。



▲図1 大門遺跡と周辺の遺跡 (△は弥生、▽は中世、◇は弥生と中世の複合)

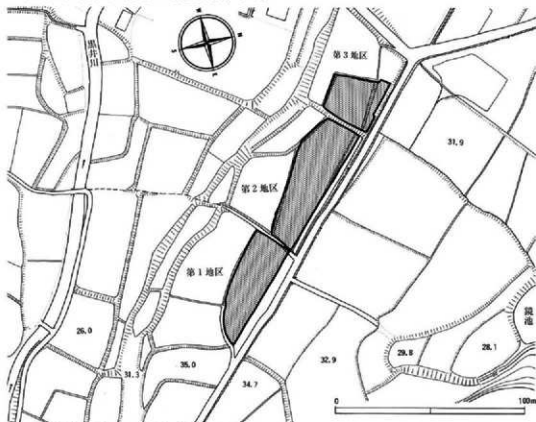
発掘調査のあらまし

あじさいの花に朝露が光る平成2年7月5日、大門遺跡の発掘調査は開始された。ここに至る経過は次のとおりである。

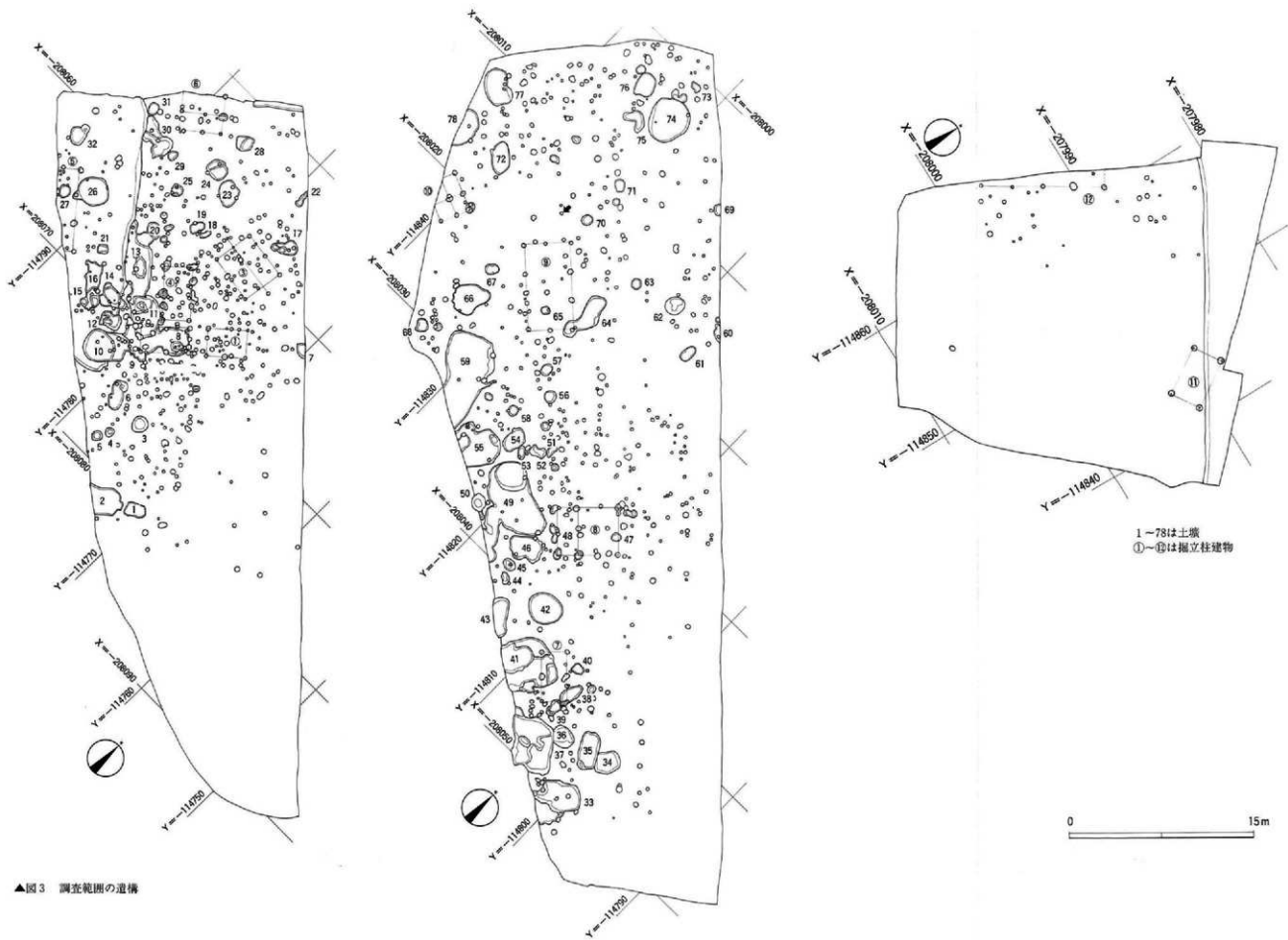
県内各地で推進されている圃場整備事業は、農業生産基盤の整備を目指すものであるが、同時に貴重な埋蔵文化財の破壊を伴うことがある。そこで山口県教育委員会では文化財の保護のために、圃場整備事業の実施に先立って工事予定地内における埋蔵文化財の子察調査を実施し、その成果をもとに関係機関との間で調整を重ねてきた。大門遺跡を含む地域における圃場整備の施工は平成2年度から予定されることとなり、平成元年度に子察調査を実施した。この結果をふまえて山口県教育委員会では山口県農林部耕地課と協議を行い、事業の進展状況に合わせて発掘調査を行うこととなった。調査は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を受け、さらに山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受けて両機関が共同で行うこととなった。

調査対象地区は、子察調査によって埋蔵文化財が確認された範囲のうち、工事によって掘り下げられるところに絞られた。まず、調査対象地区を試掘調査して遺構面を確認した。それに基づいて重機と人力によって表土を除去し、遺構面を検出した後、遺構を掘り込んだ。

色づきはじめて山々から吹き降りてくる風が鈴なりの柿を揺らす平成2年10月20日、すべての記録を取り終えて現地での調査を終了した。



▲図2 調査範囲と周辺の地形 (数字は標高)



▲図3 調査範囲の遺構

姿を現わした遺構と遺物

今回調査した大門遺跡は、弥生時代前期末の土壌を中心とした遺跡で、12世紀から13世紀にかけての土壌、掘立柱建物も発見した。発見した遺構は、土壌が78基、掘立柱建物が12棟、そのほか柱穴が多数である。

今回の調査範囲は、黒井川の北側を警護に向かって延びる丘陵の南辺にあたる。便宜上、南東から、第1地区、第2地区、第3地区とした。表土の状況から推察すると、丘陵上を田畑として開墾したときに、尾根筋あたりの土を削り取って南北の谷筋へ移動し、耕地面積を確保したようである。その際に遺構もかなり損傷を受けてしまったものとみられる。各地区の遺構の分布状況からみても、尾根筋に近い方に何も無いところがあり、発見した遺構は全体的に上の部分を削り取られている。

以下、遺構と遺物についての概要を述べる。

1 土壌

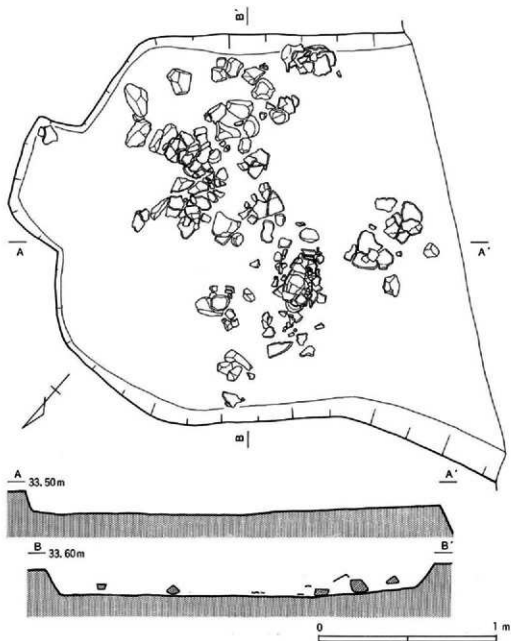
78基の土壌のうち大半は弥生時代の土壌で、12世紀から13世紀のものとは確認できた土壌は、青磁の碗（図版6-51、図12-51）が出土した3号、瓦質土器（図12-46）が出土した4号、土師器の出土した19号土壌の3基のみだが、3基とも第1地区の建物跡の付近に分布している。3号土壌の青磁は14世紀まで及ぶ可能性もある。3号土壌には1辺30-60cmの標が投げ込まれた状態で埋まっていたが、いずれも出土遺物が非常に少なく、用途ははっきりしない。

弥生時代の土壌は、今回の調査範囲からは前期末以外のものと断定できる弥生土器が出ていないため、すべて弥生時代前期末のものとは判断した。平面形は基本的に円形、楕円形、隅丸方形だが、不整形のものが多く規則性はみられない。断面形はいずれも皿形で、袋状のものはない。規模については大小様々だが、後世に削り取られたために深さの浅いものが多い。比較的規模の大きい土壌は調査地区の南辺に並んで分布しているという特徴がある。規模の大きい土壌の中には、10号、33号、37号、41号、49号土壌のように遺物の出土状況や床面の状態から、複数の土壌が重なり合っているものもみられる。しかし、埋土の様子からはそれを確認することができなかった。このことから、先に掘られた土壌が埋まる前に掘り広げられたという可能性が考えられる。これらの土壌には多量の土器が発見されたものが多い。投げ込まれた状態や、復元できないほどの細片の状態で見つかった。また、石器も多く出土した。完全な形のものはいくつか、破損して使用できなくなったものや、未製品のまま割れたものが多い。黒曜石や頁岩、赤色泥質砂岩など石材になっている岩石や珪化木の剥片も多く出土している。59号土壌からは黒曜石の石核と、おびただしい量の珪化木の剥片が発見された。珪化木は、41号、42号土壌からも多く発見され、ほかにも13号、34号、50号、64号土壌からも出土している。これは、珪化木による製品が、今回の調査では発見していないものの、今回の調査範囲外に埋まっている可能性の高いことを示唆している。74号土壌には、土器とともに大量の焼土塊が投げ

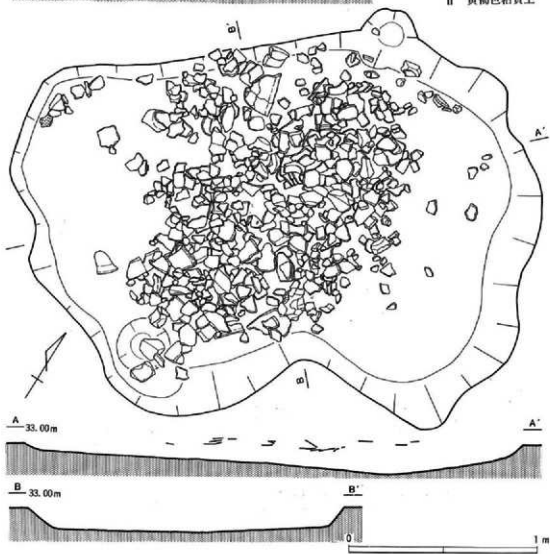
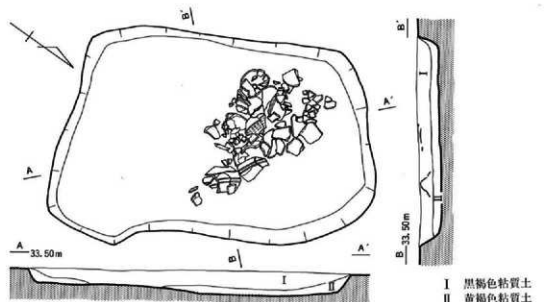
表1 土壌一覽表

番号	平面形	規模 (cm)		時期	備考
		長軸	短軸		
1	隅丸方形	165	105	13	弥生
2	凸形	(280)	215	20	弥生
3	円形	280	258	22	12-13世紀
4	円形	75	65	16	12-13世紀
5	円形	85	75	19	
6	不整形円形	240	91	19	
7	楕円形	116	(80)	22	
8	円形	260	219	15	弥生
9	楕円形	280	(135)	10	弥生
10	不整形円形	380	230	37	弥生
11	隅丸方形	345	221	33	弥生
12	隅丸方形	169	102	35	弥生
13	不整形	691	210	21	弥生
14	不整形	252	125	29	弥生
15	不整形円形	175	115	15	弥生
16	不整形	265	105	7	弥生
17	不整形円形	215	81	14	弥生
18	不整形円形	100	40	8	
19	隅丸方形	130	69	22	12-13世紀
20	楕円形	139	102	9	弥生
21	隅丸方形	91	71	12	弥生
22	溝状	140	30	7	
23	隅丸方形	220	168	9	弥生
24	楕円形	168	140	20	弥生
25	円形	98	91	12	弥生
26	円形	252	232	27	弥生
27	楕円形	108	90	9	弥生
28	隅丸方形	144	117	14	弥生
29	楕円形	90	70	9	弥生
30	不整形	(340)	100	17	弥生
31	楕円形	100	80	12	弥生
32	楕円形	145	129	27	弥生
33	不整形	450	(250)	23	弥生
34	隅丸方形	215	115	15	弥生
35	隅丸方形	335	150	22	弥生
36	楕円形	192	160	29	弥生
37	隅丸方形	444	(316)	50	弥生
38	楕円形	204	100	13	弥生
39	不整形	134	88	10	弥生
40	隅丸方形	95	74	11	
41	隅丸方形	440	(420)	50	弥生
42	円形	270	256	27	弥生
43	隅丸方形	316	(110)	23	弥生
44	楕円形	98	60	22	弥生
45	楕円形	108	84	25	弥生
46	不整形	262	165	15	弥生
47	楕円形	84	68	25	
48	不整形	160	50	35	弥生
49	楕円形	670	320	39	弥生
50	楕円形	144	112	35	弥生
51	不整形	112	54	12	弥生
52	不整形	142	65	15	弥生
53	楕円形	110	54	21	弥生
54	隅丸方形	216	130	9	弥生
55	不整形	(322)	268	15	弥生
56	円形	102	100	10	弥生
57	楕円形	106	82	20	
58	円形	90	80	14	弥生
59	不整形	(780)	410	40	弥生
60	不整形	156	(48)	4	弥生
61	楕円形	142	82	23	
62	円形	156	140	7	弥生
63	円形	90	80	39	弥生
64	不整形	430	140	27	弥生
65	楕円形	82	64	9	弥生
66	不整形	312	242	8	弥生
67	楕円形	110	78	5	弥生
68	不整形	106	96	10	
69	楕円形?	90	(50)	3	
70	円形	90	81	4	
71	楕円形	102	82	18	弥生
72	不整形円形	274	142	12	弥生
73	不整形	82	50	8	
74	不整形円形	365	320	20	弥生
75	不整形	198	82	12	弥生
76	不整形円形	210	150	10	弥生
77	隅丸方形	308	178	14	弥生
78	楕円形?	324	(142)	16	弥生

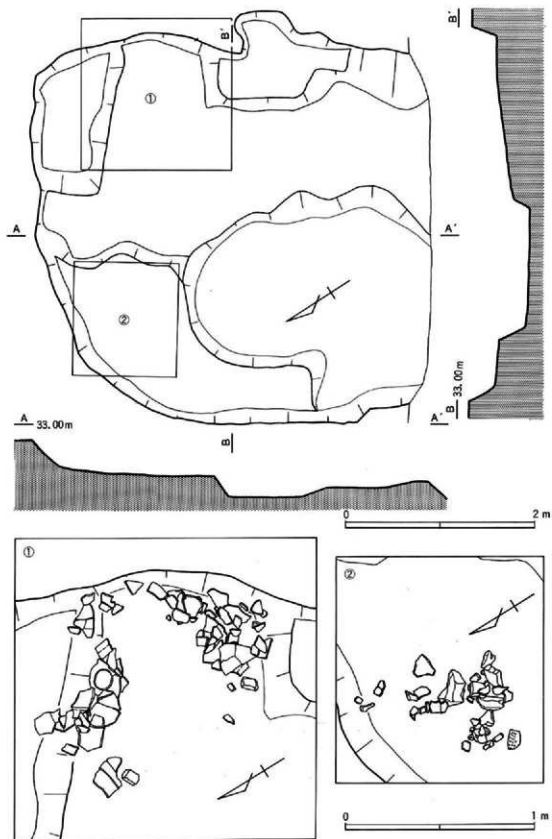
込まれていた。径10cm級の焼土塊がほぼ全面に詰められた状態で発見された。しかし、土塊の壁面や床面には火を受けた痕跡がみられないため、ほかの場所でできた焼土塊を持ってきたものと考えられる。すぐ隣の76号土壇にも同じような状態がみられ、土器を焼くなど、多量の焼土塊が生じるような火を使う場所があった可能性がある。この2つの土壇の位置が、ほかの比較的規模の大きな土壇と異なり、丘陵の南辺にないことも、その性格を考えるうえで注目される。個々の土壇については表1にまとめた。



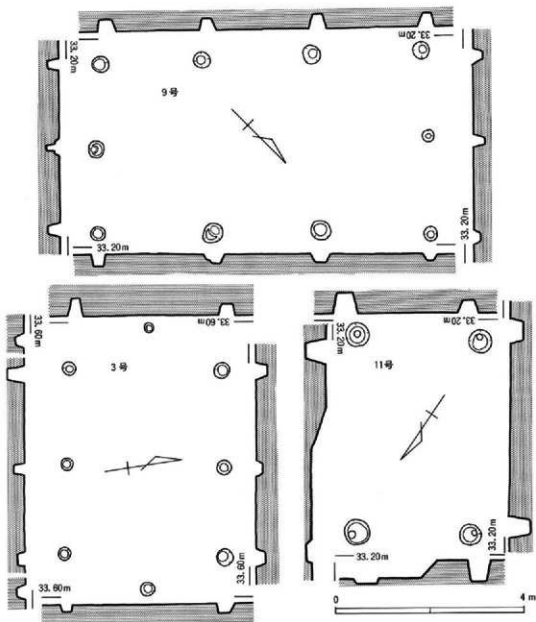
▲図4 2号土壇実測図



▲圖5 1号(上),46号(下)土壤実測図



▲图6 41号土壤灾测图



▲図7 掘立柱建物実測図

2 掘立柱建物

12棟の掘立柱建物のうち、1号、2号、3号、4号、9号建物跡の柱穴からは、12世紀から13世紀の土師器が出土しており、この時期に営まれたものと考えられる。棟方向に注目すると、1号、2号、8号建物跡がほぼ $N45^{\circ}E$ で共通しており、これとほぼ直角方向の $N45^{\circ}W$ で、4号、7号、9号建物跡が共通している。この6棟は、4棟までの出土遺物の時期が一致しているため、同時期に建てられていたものと思われる。弥生時代の掘立柱建物の可能性があるものは、6号、10号、11号建物跡だが、出土した弥生土器が流れ込んだことも考えられるため、土

壕群と同時期に建っていたと断定できるものはない。3号建物跡は棟持ち柱を備えている。棟方向もほかの同時期とみられる掘立柱建物とは異なっているため、性格の違ったものと考えられる。8号建物跡は崩をもっている。11号建物跡の柱穴は、1間×1間の掘立柱建物としては規模の大きなもので、4本ともに柱根を検出することができた。12号建物跡は、今回の調査の中では最大の掘立柱建物だが、西側が調査範囲外であり、しかも一段低く削って田をつくっているために、完全に遺構が失われている。したがって、これが掘立柱建物として成り立つのか、棚列なのかは確認することができなかった。

掘立柱建物の柱穴ではないが、図3の第2地区内の矢印の柱穴の中の上位から碗（図版6-50 図12-50）、下位から皿（図版6-49 図12-49）が出土した。いずれも12世紀の土師器である。

個々の掘立柱建物については表2にまとめた。

表2 掘立柱建物一覧表

番号	規模(間)	棟方向	桁行長	梁行長	備考(出土遺物など)
1	1×2	N48°E	320cm	220cm	12-13世紀の土師器片
2	1×2	N47°E	390cm	200cm	12-13世紀の土師器片・磁器片
3	1×2	N81°W	400cm	340cm	弥生土器片、12-13世紀の土師器片・須恵器片
4	1×4	N43°W	430cm	220cm	弥生土器片、12-13世紀の土師器片
5	2?×3	N41°W	?	670cm	南側は調査範囲外のため不明
6	2×2	N50°E	360cm	320cm	弥生土器片
7	1×2	N45°W	400cm	210cm	弥生土器片 41号土壌が埋まった後に建てられた
8	2×3	N46°E	500cm	390cm	弥生土器片 崩をもつ
9	2×3	N47°W	710cm	380cm	12-13世紀の土師器片
10	2×2	N67°W	320cm	260cm	弥生土器片、焼土
11	1×1	N33°W	420cm	250cm	弥生土器片
12	?×4	N32°E	?	990cm	棚列の可能性もある

3 土器

各遺構から、多量の弥生土器を中心に土師器、瓦質土器、磁器など多数の土器類を発見した。ここでは、紙面の関係上、整理の済んだもののうち、弥生土器を中心に代表的なものの概要を掲載するととめる。

弥生土器の壺には次のようなものがある。2は口縁部の先端を削り出してわずかな段をつくり、内面の突帯は貼りつけられている。内面は磨減がひどく調整がわからないが、外部は胴部の最広部付近にヘラ磨きがみられ、上部に羽状文を刻んでいる。口唇部、頸部の沈線と胴部の文様はヘラを用いている。4は全体にかなり歪んでいる。口縁部の先端を削り出して段をつくり、内面に突帯を貼りつけている。調整は、磨減が著しく内外面ともに不明だが、胴部の上位に貝殻によって羽状文が施されている。31は頸部と胴部の境目に削り出しによって段を設けている。内面の調整は磨減してはっきりしない。外面は、底部には刷毛調整を行い、胴部から頸部にかけてはヘラ磨き、上位に独特の文様を刻んでいる。文様にはヘラを用いている。弥生土器の壺はこのほかにも多数出土しているが、その文様に注目すると羽状文を基調としたもの

(5、26、27、28、29、30、43、52)が大半である。7と45は広口大型甕である。ともに全体的に歪んでいるが、とくに45は甚だしい。頸部と胴部の境目は、7は段を削り出しているが、45は1条の沈線を入れている。ともに内外面とも刷毛目調整を施している。

甕をみると、口縁部の下に入る沈線が1本のもの(1、12、13、17、20、22、24、33、35)が大半で、2本のものはあるが(34、36)3本以上のものはみられない。1と24は口縁部の下にやや太めの沈線が1本入っている。全体に磨滅がひどいが、1は外面底部に下から上に向かって刷毛目調整が施されている。3は口縁部の下から胴部にかけて、壺の胴部にみられるような羽状文を中心とした文様が、ヘラを用いて刻まれている。ひどく磨滅しているため調整はわからない。8、13、20、33は外面に刷毛目調整をした後、沈線を1本入れ、その上の刷毛目をナデで消しているが、35はナデをせず刷毛目を残している。ともに口縁部には刻み目を入れている。内面は磨滅しているが、20には一部刷毛目がみられる。34、36は外面に刷毛目調整を行った後、2本の沈線を入れている。内面は磨滅しているが、34には刷毛目調整の痕跡がみられる。32の外面には刷毛目調整の後、口縁部の下に突帯が貼りつけられている。内面は磨滅。17、25は外面に刷毛目調整をした後、口縁部の下に突起をつけている。突起の数は、17は不明だが25は6箇所と推定される。17は突起より上の位置に沈線が1本入れられている。25の口縁部は粘土を貼りつけて形成している。

44は朝鮮系無文土器である。今回の調査で発見した朝鮮系無文土器はこの1点だけである。

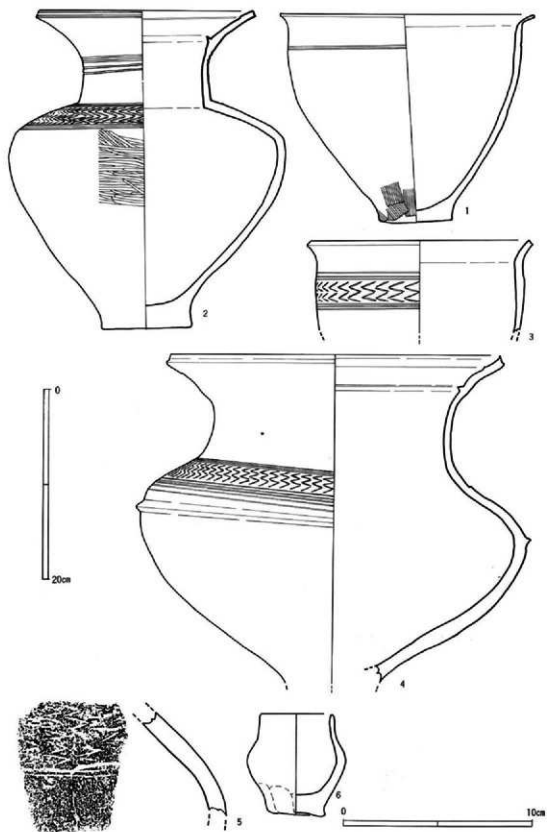
47、48、49、50は土師器である。いずれも底部に糸切り痕がみられる。47、49、50は内外面とも回転ナデ、内面底部は横ナデ調整。50は高台を貼りつけている。48は内外面ともに静止ナデ調整。46は瓦質土器で、内外面ともに刷毛目調整を行っている。51は外面に連弁文が施された龍泉窯系の青磁である。

4 石器

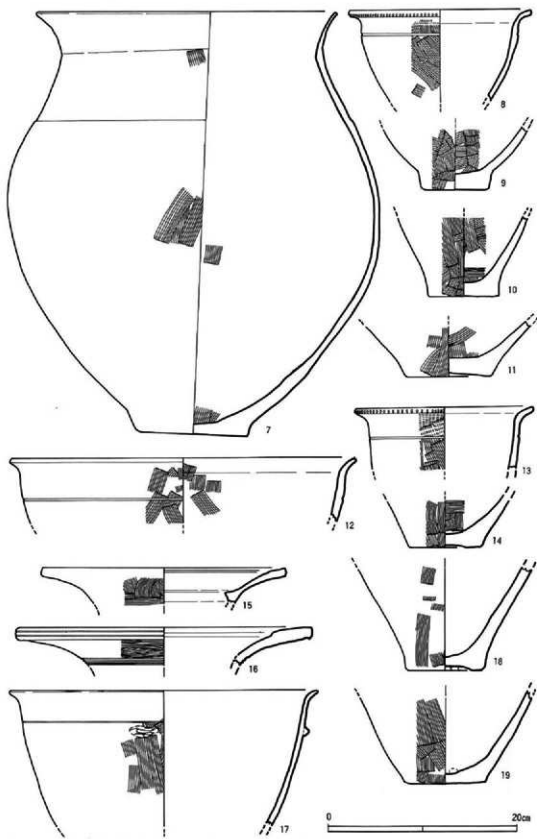
石器も多数発見された。未製品、石材の剥片、破損して使用できなくなったものが多くみられたのが特徴である。主なものについて表3にまとめた。

5 土製品

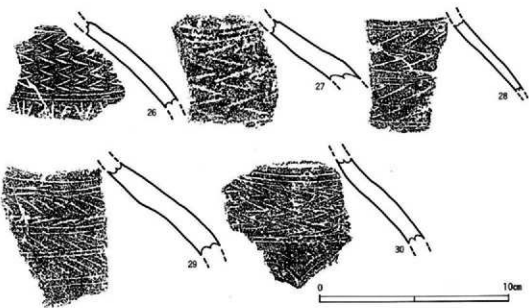
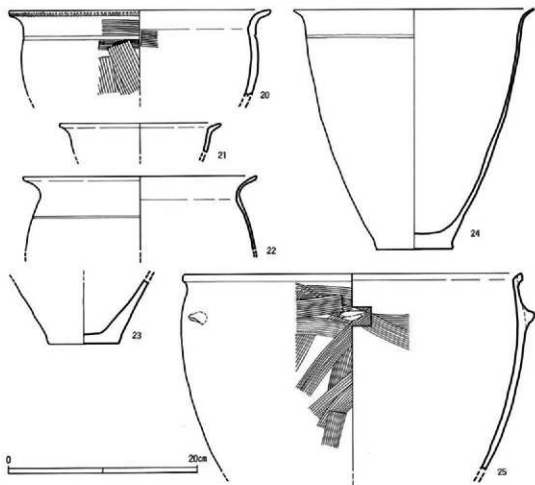
77は陶埴である。吹口の一部と指孔1箇所が残存している。器形は倒卵形と推測される。内外面とも磨滅がひどい。78、79は土錘である。41は縦に溝が1条つけられている。双方とも表面は磨滅している。80、83、84は紡錘車である。80は土器の一部を転用して紡錘車につくり直している。穿孔が中心からかなりずれているため、バランスが悪く使いにくかったと思われる。83、84は一部を欠損して廃棄されたものと考えられる。81、82、85、86は土製円盤である。土器の胴部を再利用して丸く加工したものである。81、82は磨滅してもとの調整がはっきりしないが、85、86は刷毛目調整がなされている。いずれも廃棄された状態で出土したが、どのように利用をしていたのか不明である。80のように紡錘車に再加工しようとしたものを途中で捨ててしまったものという可能性もある。



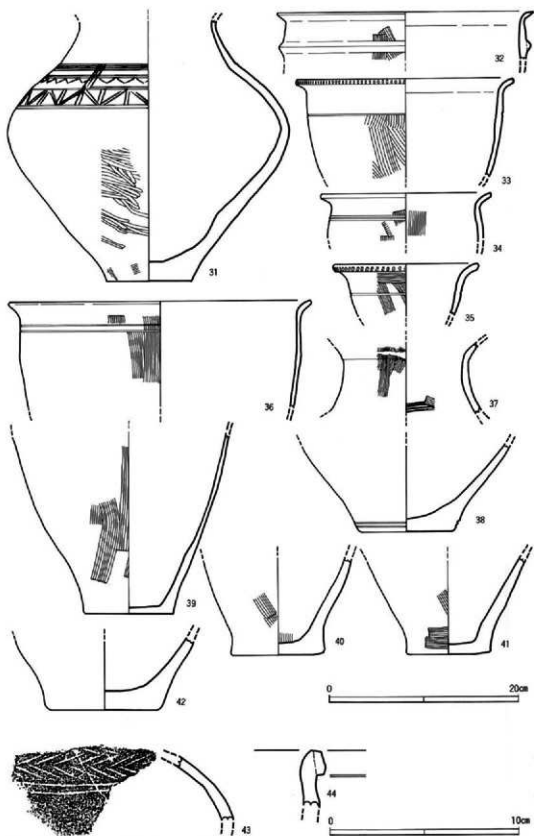
▲图8 出土土器实测图 (1) 1号土器(2·5·6)、2号土器(1·4)、37号土器(3)



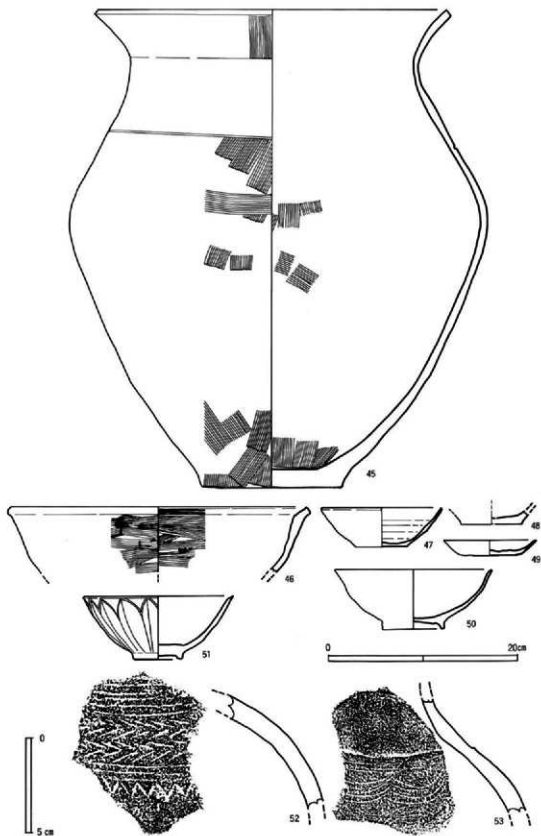
▲图9 出土土器实测图(2) 41号土罐(7-12)、42号土罐(13-19)



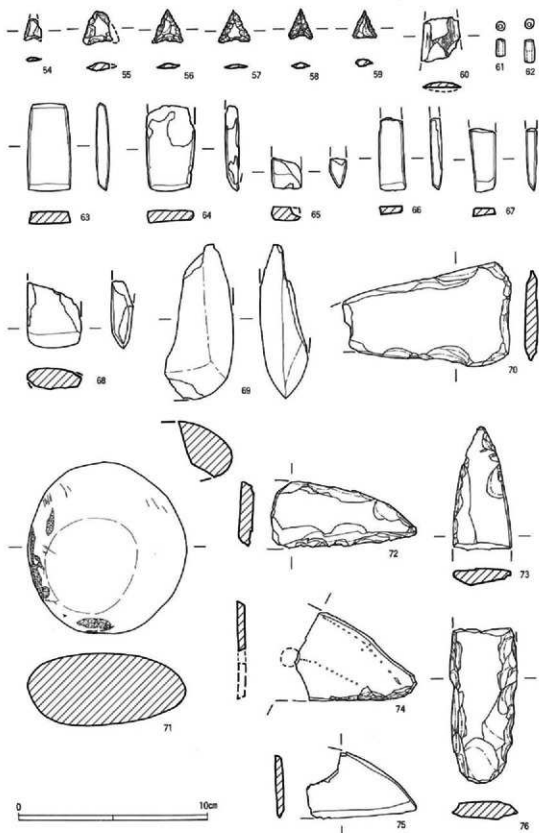
▲图10 出土土器实测图(3) 8号土埴(26)、41号土埴(30)、42号土埴(20~23、26·27·29)、46号土埴(24·25·28)



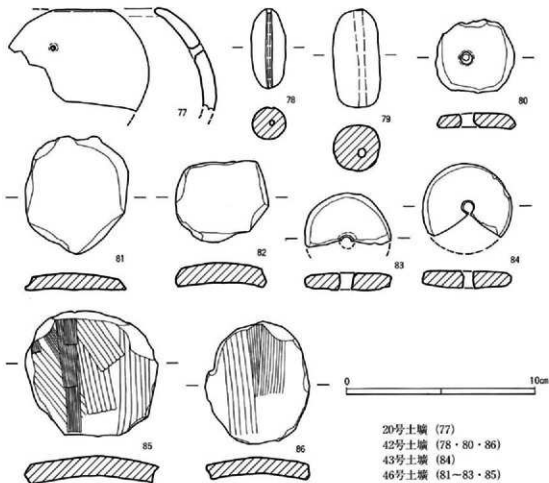
▲图11 出土土器实测图(4) 49号土坑(31~44)



▲図12 出土土器実測図 (5) 3号土壺(51)、4号土壺(46-48)、74号土壺(45・52・53)、図3矢印の柱穴(49・50)



▲图13 出土石器实测图



▲図14 出土土製品実測図

表3 石器一覧表 (図版10 図13)

番号	出土遺構	器種	石材	備考
54	20号土壌	石鏃	頁岩	先端部を欠く
55	36号土壌	石鏃	流紋岩質凝灰岩	一部を欠損
56	37号土壌	石鏃	泥岩のホルンフェルス	
57	42号土壌	石鏃	泥岩のホルンフェルス	
58	49号土壌	石鏃	黒曜石	
59	50号土壌	石鏃	泥岩のホルンフェルス	
60	33号土壌	磨製石鏃	頁岩	大半を欠く 片面は割離
61	33号土壌	管工	翡翠の系統	
62	49号土壌	管工	翡翠の系統	一部を欠損
63	41号土壌	扁平片刃石斧	頁岩	
64	49号土壌	扁平片刃石斧	頁岩	一部を欠損
65	49号土壌	扁平片刃石斧	頁岩	先端部のみを残す
66	49号土壌	扁平片刃石斧	頁岩	一部を欠損
67	42号土壌	扁平片刃石斧	頁岩	一部を欠損
68	20号土壌	扁平片刃石斧	赤色泥質砂岩	先端部のみを残す
69	42号土壌	扁平片刃石斧		大半を欠損
70	65号土壌	石鏃	頁岩	未製品 先端部を欠損
71	41号土壌	叩き石	砂岩	
72	41号土壌	石錐丁	頁岩	未製品 一部を欠損
73	50号土壌	石錐丁	頁岩	未製品 一部を欠損 片面に2回の打撃痕が重ぶ
74	41号土壌	石錐丁	頁岩	未製品 一部を欠損
75	49号土壌	石錐丁	赤色泥質砂岩	未製品 一部を欠損
76	41号土壌	不明	赤色泥質砂岩	未製品

ま と め

大門遺跡は、平成元年度の、圃場整備事業に先立つ埋蔵文化財の予察調査によって、黒井川の北側の丘陵の上に発見された。以前から周知の遺跡となっている大門遺跡は、ため池を挟んださらに北側に位置するが、これと一連の遺跡とした。今回の調査は、この大門遺跡の南辺にあたることを調査範囲としている。

今回の調査では、弥生時代前期末および12世紀から13世紀にかけての集落跡を確認した。発見した遺構は、土塼、掘立柱建物と多くの柱穴である。またこれらに伴って、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、磁器などの土器類や、石器、土製品などの遺物が出土した。以下、時期ごとに分けて整理し、まとめたい。

弥生前期末の土塼は61基、その可能性のある掘立柱建物は3棟である。ただし、掘立柱建物については、決め手となる遺物が乏しく、同時期のものと断定することはできない。住居跡は、今回の調査範囲にはなかった。弥生時代の土塼群は、平面形に規則性がなく、断面はすべて畝状である。調査範囲の南辺に比較的規模の大きな土塼が並んで分布している。これらの土塼の中には、段階状に掘り広げられて大きくなったものもある。遺物はこれらの土塼に集中し、土器は、投げ捨てられたような状態や、復元ができないほどの細片になった状態で出土している。石器も多いが、破損して使用できなくなったものや、製作過程で壊れた不製品が発見された。また、石材の剥片も多くみられる。さらに、珪化木の剥片も多く、とくに59号土塼では大量に発見した。土塼の分布状況に注目すると次のようなことが考えられる。調査範囲のさらに南には、黒井川に浸食された崖が迫っていることから、この集落の住居は、丘陵の尾根筋を走る現在の道を隔てた北側の未調査地区に位置する。今回発見した土塼は、集落の南の端に並べてつくられたものである。また、土塼の出土遺物に注目すると次のようなことがいえる。前述のような出土状況から、今回発見した土塼群は、基本的に通常の生活で使用できなくなったものを廃棄するための穴である。ただし、石器の不製品や石材の剥片が多く、59号土塼では黒曜石の石核や珪化木の剥片が大量に出土していることなどから、とくに第2地区の土塼は石器の製作に深く関わりがあるものである。このほか、74号土塼のように、ほかの場所でもきた焼土塊を土器とともに廃棄している土塼もあり、付近で土器の構成などを行った可能性を示している。豊浦町南部には、中ノ浜遺跡をはじめ、この時期の遺跡が多く、発掘調査の進展とともに総合的な研究が必要となってこよう。

12世紀から13世紀の土塼は3基、掘立柱建物は7棟である。土塼は出土遺物が少なく、用途がはっきりしない。掘立柱建物は6棟の棟方向が一致するため一連の建物と考えられる。3基の土塼は、一連の1号、2号、4号建物跡を挟むように位置し、これらに付随するものと考えられる。近世に整備された北瀬道筋がすぐ目の前を横切っているが、この前身となる街道に関係する建物だったことも考えられる。

山口県埋蔵文化財調査報告第141集

大 門 遺 跡

平成2年度県営圃場整備
事業に伴う発掘調査報告

平成3年3月

編集 財団法人山口県教育財団
(山口市大手町2130)
山口県教育委員会文化課
(山口市滝町1-1)
山口県埋蔵文化財センター
(山口市春日町3-22)
発行 財団法人山口県教育財団
(山口市大手町2130)
山口県教育委員会
(山口市滝町1-1)
印刷 隣報社写真印刷株式会社
(下関市大字清木1328番地)
